「ぬくもりを届けたい、手から心へ」……

たまちゃん通信

令和5年4月発行 No. 361

発行：日本のお手玉の会事務局　〒792-0023　愛媛県新居浜市繋本町８番565号
新居浜市市民文化センター別館１階
Mail: honbu@otedama.jp Tel: 0897-47-6148　FAX：0897-47-6149

シンポジウム「未来のお手玉」余話 その4

多くの人を魅了するお手玉遊び世界への飛翔①(山本清洋)

～お手玉遊び大会の魅力　その１～

江戸時代の庶民が暮らす長屋の路地や大きなお店の前で子どもが今で言う両手２個ゆりで遊んでいる風景をよく見かけます。ちなみに平安時代から江戸時代のまでの資料によれば、当時のお手玉遊びは、歌に合わせた拾い玉がほとんどです。おもしろいのは、地面や床におく石の数が５つ、あるいは７つ、時には31個でありますが、その理由は不明で地域によって異なっていたようです。空中に投げ上げた石が落ちるまでに地面や床の石をひろいあげるという遊び方が一般的で、拾い損じたら相手と交代していたようです。ちなみに、布で作ったお手玉（中には石、貝殻、穀物を入れた）になったのは江戸時代後期頃からといわれています。**（バックの絵「お手玉」は「幼雅昔雛形（おさなあそびむかしひながた）1844から）**

さて、石で遊んでいた時代の「石などり」は、地面や床に置いた石を奪い合う競技ですが、布で作ったお手玉が出来てから、玉を巧みにもてあそぶ「品玉」系の遊びが生まれています。いわば、遊びの出来栄えを競い合う遊びが加わり、江戸後期からは、今で言う「ゆり玉」と「よせ玉」で子どもが遊んでいたことが推察されます。新しく生まれた「ゆり玉」に子どもが魅了されていた様子を明治時代の子どもの言葉が示しています。

「はじめ二つでやりますでしょう。それが三つになり、四つになり、五つになり、わしら五つまでしたんでっせ。五つぐらいでする時には、重いのや軽いのがあると調子がはづれるんです。それで、おじゃみの目方をちゃんと計って同じくらいにして、高いところまで上げて右から左へうまく回していかんとね・・・」（明治の子ども　遊びと暮らし　1986）

おそらく「よせ玉」でもお手玉を操作する技術に魅了されていたことは容易に予想され、子どもたちが競い合いながらも豊かに楽しんでいる手玉遊びの世界が思い浮かびます。お手玉遊びの人数は「よせ玉」であれ、「ゆり玉」であれ、おそらく２人以上の数人であることは推察できます。しかし、文献で見る限り、お手玉遊びで、敵味方に分かれて技を競い合ったり、戦ったりする遊び方は「日本のお手玉の会」誕生以前はほとんどみられません。次回は、相手より優れていることを競い合う「品玉」系でありながら、相手チームと激しい戦いの中に、和やかさ、笑い、充実感が生まれる「お手玉遊び大会の特徴と不思議さ」に迫ります。**（日本のお手玉の会副会長・NPO法人日本子どもと伝承遊び学会会長）**